

将来のパンデミックに備える感染源の解明

◆世界保健機関が新たな病原体の感染源に関する諮問委員会を設置

2021年10月、世界保健機関（WHO）は、新たな病原体の感染源を調査する体制の確立を目的とする諮問委員会Scientific Advisory Group for the Origins of Novel Pathogens（SAGO）の委員を発表した。公募に応じた700人の中から、地域やジェンダーの多様性が配慮され、疫学、獣医学、生態学、臨床医学、ウイルス学、ゲノム科学、分子疫学、分子生物学、生物学、食品安全性、生物安全性、バイオセキュリティ、公衆衛生の専門家からなる26人が選ばれた。11月に入って、さらに、社会科学、人類学、倫理学、政治学、生物安全性／バイオセキュリティの分野のSAGO委員3人の追加募集が行われた。新型コロナウイルス感染症COVID-19の原因ウイルスであるSARS-CoV-2の感染源に関しては、WHOと中国の調査により、コウモリなどが有力視されているが、結論は出ていない。もし、感染源が特定できれば、将来の感染症の発生や拡大を防げる可能性がある。SAGOは、病原体の出現や再出現を研究する世界的な枠組み作り、研究や現地調査の優先順位付けなどに関してWHOに助言を行う。

◆感染症から回復した患者の体内に長期間潜伏するエボラウイルス

21年9月、ギニアのコナクリ大学などの研究チームは、エボラウイルスに感染すると、病状が回復した後でも、長期間、ウイルスが体内に潜伏している可能性があるとして発表した。ギニアで21年2月に発生したエボラウイルス感染症の小規模な流行の際に患者から採取されたウイルスのゲノムと、13年から16年にかけての西アフリカでの大流行の際に、ギニアの同じ地域で採取されたウイルスのゲノムを比較した。両者の配列は極めて類似しており、ウイルスゲノムの変異を伴う感染が繰り返されたのではなく、人間の体内でウイルスの複製が抑えられるか、休止した状態で留まっていたと考えられる。エボラウイルスの感染源についてもコウモリなどが候補に挙がっているが、まだ、結論は出ていない。人間の体内に潜伏するウイルスが感染症の再発生の原因の少なくとも一部であれば、該当者の定期的な検診を行うなど、対策を立てることが容易になる。 【戸潤一孔】